

歴史を語る地名

東光 博英

九州の福岡に今も忘れられない地名がある。子供の頃、市バスの車内で「次は唐人町…」と聞いたりすると、言葉の響きから何となく異国情緒を感じたものだ。異風な渡来人と華やかな海外貿易を想像するだけの子供時代の淡い思い出である。実は、地名としての「唐人町」は九州のほとんどの県に存在する。かつて中国大陆と交易していた地域にあり、大抵は唐船の碇泊地や唐人が居住していたことに由来する。ただ、随分後になって異説があることを知った。これはまったく子供の頃の想いを打ち砕くものであった。

1592～98年に豊臣秀吉が朝鮮半島に出兵した時（文禄・慶長の役）、多数の朝鮮人が日本に連行された。即ち、その捕虜を居住させた場所だというのである。内外の史料が示すように、日本軍は現地で盛んに略奪したから、捕虜といっても拉致された住民が大半を占めたに違いない。祖国を蹂躪されたうえに異国に連行された人々の悲しみは察するに余りあるが、彼らは来日後、さらなる苦難に見舞われた。その頃長崎を訪れたイタリア商人カルレッティは、子供を含む多くの朝鮮人男女が奴隷として安値で売られ、彼自身も5名買ったことや、彼らにキリスト教の洗礼を受けさせた後にインドへ連れて行き自由にしてやったこと、またその内の一人をフィレンツェにまで伴ったことを著書で述べている（『世界周遊談』第2部第1章）。当時、南蛮貿易の主役だったポルトガル人は、少なくとも1560年代から、主要交易品の銀の外に、日本人奴隷を多数買い取って海外に運び去っていたから、拉致された朝鮮人も、転売されてさらに遠くの国へ送られた者が少なくなかったはずだ。この人身売買を止めさせようと長年努めていたのは在日イエズス会士であった。朝鮮人奴隷について、彼らの1595年度日本年報には有馬領で2000名が受洗したとあり、翌年度の年報には長崎にいた1300名以上の朝鮮人を教化したと記されている。この時期、他の地域の報告にも同様の記事があるので、全体的には相当な人数に上るであろう。このように、イエズス会は捕虜を奴隷の境遇から救うとともにキリスト教へ改宗させていたのであり、その中から熱心な信者も現れている。17世紀になると、日間島の交渉により大勢の朝鮮人が帰国する一方、日本に留まった人もあり、篤信者はやがてキリスト教禁制によって始まる新たな苦難にさらされることになった。「ジュリヤおたあ」もその一人である。彼女は幼少の頃、朝鮮戦役に参加したキリシタン大名小西行長に捕らえられて来日、信者になった。小西氏没落後は徳川家康の大奥に入るも、なお信仰と徳を保って範を示し、禁教令の際にも屈しなかったため伊豆大島に流された。まさに歴史に翻弄された一生である。

異国の薫りをたたえる「唐人町」の名称にもこれだけの歴史が背景にある。今更ながらに地名の重さが身にしみる。近年、市町村合併により新市名が誕生するかたわら旧名が消滅している。1000年以上の歴史をもちながら消えた地名があると聞く。また、一旦消えてから復活した例もある。ブランド魚の「関あじ」で有名な大分県佐賀関町である。2005年大分市との合併で町名が消え、大字名の「関」が残って大分市大字関に変わった。ところが、「佐賀関」を惜しむ地元住民の請願により昨年復活し大分市大字佐賀関となった。住民の熱意のなせる業といえるが、二つの名称とも古文書に見られる歴史的な地名である。また、ここは日欧交渉史では南蛮船の来航地として知られる。西欧で作られた単独の日本図として最初とされるテイセイラの地図（1595年）にXanganoxeque（サガノセキ）と記されている。他方、「関」については、来日したポルトガル人フェルナン・メンデス・ピントが1556年日本を去る時、佐賀関で乗船したが、後に彼が著しポルトガル文学の代表作となる*Peregrinação*（『東洋遍歴記』1614年）にはXeque（セキ）とある。これは「関」のことと思われる。このように両地名は今日西欧の文化財である古地図や文学作品にも残されている。地名は風土や歴史を物語るという。大事にしたいものである。

とうこう ひろひで（非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史）